

前回の本欄で、横浜町と六ヶ所村にまたがる吹越烏帽子岳からの眺望を活用した上北地域の再評価の意義を提唱した。それでは、どうすれば再評価することができて、全国に誇れるこの地域を正当なポジションに持っていきけるかを読者の皆さんと一緒に考えたい。たたき台として1、2例の私見を書かせていただく。

まずは「百聞は一見に如かず」である。吹越烏帽子岳に登山道や観光道、案内板などを整備し、多くの方々に足を運んでもらうことから始めよう。

何事もそうだが、地域の価値を再評価することは、そこに暮らす人々が地元を正しく理解することから始まる。木は見ていても森が見えていないのであれば、その木自体の価値を十分に理解し評価することは難しい。

上北地域の自治体にはそれぞれの歴史と文化を紹介し、教育・文化活動や観光に資するべく、「木」に相当する資料館などが整備されている。ところが、地域全体を俯瞰し、紹介する「森」に当たる施設は見られない。これも整備しよう。

愛称付け全国にPRを

新たに建物を造るのが従来のやり方であったと思うが、そんな無駄で不合理なことをする必要はない。既存の施設に、その機能を付加させればよい。吹越

私見 Sunday 創見

上北地域を売り込め



下谷 栄治

NORDD58
顧問事務所代表

しもや・えいじ
1951年、北海道生まれ。エレクトロニクス技術者。室蘭工業大学卒業。

ルギーを実際に見て、触れる機会を増やすことで、地球環境と調和した将来のエネルギーの在り方に関する理解を深めてもらうためのプロジェクトである。上北地域全体が風力や太陽光

ルギーを実際に見て、触れる機会を増やすことで、地球環境と調和した将来のエネルギーの在り方に関する理解を深めてもらうためのプロジェクトである。上北地域全体が風力や太陽光

な名称(愛称)を付けたらよいのではないか。全国に募集するのも一つの手段である。例えば「上北台地」「東八甲田丘陵」「おいらせ丘陵」「おいらせ平野」「十和田平野」…。西の津軽平野、東の○○○○という形で売り出せば、相乗効果も期待できるのではないか。歌謡曲に取り上げられ、親しまれると、一気にクローズアップされることは間違いない。

上北地域の愛称をあらゆる機会に頻繁に露出させる仕掛けも必要である。歌謡曲だけでなく、俳句や短歌、絵画、写真の分野でもモチーフになるはずだ。

まずは上北地域の関係自治体が集まり、協議して「から」という役所主導のやり方では、時間がかかるし、実効性のある活動はおぼつかない。そこで、地域を知り尽くした学芸員のノウハウを活用してはどうか。また、エネルギー関連企業や歌謡曲を手掛ける芸能事務所、文芸、観光、スポーツ、まちおこしなどの民間団体の関係者が結集する方が望ましい。そのためにも、

津軽平野は多くの歌謡曲に登場しており、それが全国的なPRに極めて有効に作用している。北海道の石狩平野がしかりであり、関東の武蔵野台地は文学の香りが漂う。それならば、吹越烏帽子岳から眺望できる上北地域に普遍的

鳥帽子岳の懐に位置する、六ヶ所村立郷土館にその役割を担ってもらうことも考えられよう。同村では経済産業省が認定する「次世代エネルギーパーク」の取り組みが実績を挙げている。これは、国民が次世代エネ